様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７２０３０９

研究課題名（和文）「コミュニスト」の創造：コミンテルン期における共産主義者形成過程の国際史学的考察

研究課題名（英文）The Making of the Communists: A Global History of the Communists during the Comintern years

研究代表者
瀧口　順也（Takiguchi, Junya）

龍谷大学・国際文化学部・講師

研究者番号：１０５９６８０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：コミンテルン期（1919- 1943年）におけるコミュニスト・アイデンティティの形成過程をグローバルな視点から描き出すことを目的とし、ソ連共産党（ボリシェヴィキ）が定義する「理想的なコミュニスト」が、英国や日本共産党内部でどのように伝えられ、また各党員に内面化されたのかに迫った。モスクワのコミンテルン・アーカイヴ、英国マンチェスターのイギリス共産党アーカイヴが所蔵する史料の収集に努め、上記のテーマへの接近をこころみた。
　モスクワが示すコミュニスト像の変遷と、この時代を生きたイギリスおよび日本共産党員に関する考察を進めた。

研究成果の概要（英文）：This project seeks to explore the way in which Communist identity was “globalized” during the years of the Third Communist International (the Comintern). Communist identity was first represented and defined in Moscow by Bolshevik leadership and was permeated through various media and the Comintern representatives to the Communist Party members abroad. To highlight the means of globalization of the Communist identity, it takes the Communist Party of Greta Britain and the Japanese Communist Party as case studies.
One of the most important products of the project is to investigate into materials of multiple archives, including the ones in Moscow and Manchester. These documents show how the Soviet leaders represented the correct way of becoming Communists and how it was sought to implement to the rank-and-file members in the Communist Parties outside the Soviet Union.

研究分野：史学一般

キーワード：共産主義　20世紀史　グローバル・ヒストリー

１．研究開始当初の背景

1991 年のソ連解体以降に、ソ連共産党関連および各国の共産党関連の文書が次々に公開されている。この間に、さまざまな視点から共産党やコミュニスト・インターナショナル（以下、「コミンテルン」と表記）に関する研究が行われているが、最新のコミンテルン関係書の編集者が指摘する通り、未だにそれらの多くは各国共産党もしくはコミンテルンの機構分析に傾注したものが大多数を占めていた(N. LaPorte et al. eds., *Bolshevism, Stalinism and the Comintern*, 2008）。他方で、歴史学の潮流として、対象の枠組みを国家単位でなく、より動態的な人・モノ・資本・思想などの流れと相関性を描こうとする「グローバル・ヒストリー」の隆盛があった。

本研究は、グローバル・ヒストリーの視座を参照しながら、これまで十分には議論されてこなかった切り口から共産党という政治集団および共産主義者、また彼らの「コミュニスト・アイデンティティ」の形成過程を描き出す新たな国際史学としての試みとして開始した。それは、1917 年のソ連共産党（ボリシェヴィキ）による政権掌握から 1943 年のコミンテルン解散までの期間に「コミュニスト・アイデンティティ」がどのように定義付けられ、その定義は変遷し、普及され、国際的な規模で創造されようとしたのかを考察する重層的かつグローバルな歴史研究である。

２．研究の目的

本研究は､1919-1943 年のコミンテルン期に、コミュニストおよび彼・彼女らのアイデンティティがどのように定義され、普及されようとしたのかを考察する。コミンテルンの指導的役割を担っていたソ連共産党（ボリシェヴィキ）への視点と、ソ連外部（イギリス共産党・日本共産党）への考察を組み合わせる事で、新しいアイデンティティの形成へ向けた理念上の変化や実践の過程を複合的かつ国際的に描き出すことを目的とした。より具体的には、以下の二つを柱とする。

（１）ボリシェヴィキを考察の主体に据えて、「コミュニスト」という概念は具体的にどのように定義されていたのか、1919 年から 1943 年までの間にどのような変節を経験したのか、そしてボリシェヴィキ党大会やコミンテルン大会という機会は如何に利用されたのかを明らかにする。この研究から、ボリシェヴィキが「国際主義」「コミュニストの創造」という大義を用いて、諸外国の共産主義者の統合をこころみた過程を描き出す。

（２）第二の柱は、ボリシェヴィキから発せられる理念と指針の「受け手」であったソ連外部の各国共産党において、各国共産党指導部はどのような実践をもって「コミュニスト」というアイデンティティを自国の党員達に植え付けようとしたのかを明らかにすることにある。

このコミュニズムまた共産主義運動の伝播の実態を考察する為に、事例研究としてイギリス共産党と日本共産党を取り上げる。イギリス・日本共産党共に、膨大な数の史料が利用可能になってはいるが、現在までの研究の中でそれらが十分に活かされているとは言い難い。ボリシェヴィキ幹部が唯一の行為の主体者でなく、イギリス・日本共産党の幹部を中間的な「能動的アクター」と認識することにより、コミンテルン期に行われた共産主義運動の実践、ソ連外部での変化、モスクワと各国での理念の齟齬、伝播される中で起きた変質などを明らかにする。

３．研究の方法

本研究の遂行にあたって、複数の国にまたがるアーカイブ史料の収集とその他の一次史料を収集・閲覧し考察を進めた。

（１）ソ連共産党関連史料、コミンテルン史料については、モスクワのソ連共産党アーカイブ、コミンテルン・アーカイブ、北海道大学スラブ研究センター、ブダペストの Open Society Archives などを中心に収集を行った。

（２）イギリス共産党関連史料については、マンチェスターのイギリス共産党アーカイブ（正式名称「労働史文書館および研究センター」）にて史料収集を行った。日本共産党関連史料については、一橋大学図書館所蔵のマイクロフィルム（モスクワにある同フィルムのコピー）などを中心に閲覧した。

４．研究成果

（１）ボリシェヴィキの描くコミュニスト

ロシア共産党アーカイブ史料やその他の出版物などから、コミンテルンの黎明期においては、人的ネットワークを活用することで、そのイデオロギーの世界化をこころみていた時期ではあるが、それが具体的な事象・事例として顕在化するまでには至らなかったことが指摘できる。他方で、ソ連国内では、さまざまな形で「理想的なコミュニスト像」が提起され、大衆のなかにも実験的な実践を通じてそのアイデアが注入されようとした。

政治的な場として重要な機会となったのは､1920 年代前半は毎年開催されていたボリシェヴィキ党大会およびコミンテルン大会であり、これらの機会においてコミュニズムの世界化に向けた戦略が討議され、それらの決定は実質的な重要性をもっていた。レーニンが逝去した 1924 年以降になると、ボリシェヴィキ内部の権力闘争が激化し、コミュニズムの世界化よりも、ソ連内部の政治闘争が強まる時期となった。

スターリン権力が確立し始める 1920 年代後半から 1930 年代に入ると、政治大会の場はスターリンを指導的立場となったソ連および世界革命のリーダーとして表象するようになる。他方で、コミンテルンは形骸化し始め、大会も開催されなくなる。ボリシェヴィキはコミュニスト政権のグローバル化を中断し、反ファシスト同盟の強化を進めていく。1935 年に開催された第七回コミンテルン大会（1930 年代に開催された唯一のコミンテルン大会であり、結果的に最後の大会となる）においては、「統一戦線」を指針とすることが確認され、コミュニズムの世界化は後景化する。同大会においてスターリンは積極的にかかわることはなく、大会の主役はブルガリア共産党のディミトロフが担うことになった。

（２）ソ連国外の共産党員にとっての「コミュニスト・アイデンティティ」

イギリス共産党アーカイブや日本共産党関連文書の収集から、1920～1930 年代の各国共産党におけるコミュニズムを浸透させる過程や各国共産党内の議論に照射した。とりわけ重要な発見として、イギリス共産党アーカイブに所蔵されている同党幹部 J.T.（ジャック・）マーフィーの妻であったモリー・マーフィーの自伝的回想録があり、この史料を手掛かりとしての事例研究を行った。モリーは、母親の影響から女性活動家となり、その後ジャックとの結婚を契機として共産党員となった。ジャックのモスクワ赴任に伴い、二度のモスクワ長期滞在も経験し、レーニンらボリシェヴィキ幹部とも知己を得た。1930 年代にイギリス共産党内部の軋轢によってジャックが離党するとモリーも続いて離党し、その後は共産党とは距離を置き続けた。

モリー・マーフィーの自伝が語るのは、確固たる共産主義者としてのアイデンティティの確立とその強化というよりは、共産主義運動・労働運動・女性参政権拡大運動を通じてのコミュニティの拡大と、そのコミュニティがモリーに居心地の良さを与えていたという回想である。自伝的回想録の中で、モリーは繰り返し自分自身が政治的な人間ではないことを強調し、またイデオロギー的な偏りも否定する。ただし、共産党というコミュニティとその活動の場がモリーやその他の「ニュー・コミュニスト」らにとって「公共圏」的な機能を有しており、この空間を通じて（本人は否定するものの）政治化されていった主体を浮き上がらせることができた。他方で、この回想録は曖昧な出自も有しており、このなかで表象されている「非政治的なコミュニスト」が、どれだけモリーの心情を反映しているかについては、他の文献史料を渉猟したうえでのさらなる考察が必要である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

① 瀧口　順也「歴史としての個人史 ― 伝記、自叙伝、主体の混乱」『国際文化研究』19 号、19－28、2015〔査読有〕
http://repo.lib.ryukoku.ac.jp/jspui/handle/10519/344

② 瀧口　順也「プロレトクリトと『新しい文化』－　初期ソヴィエト政権下におけるプロレタリア文化の創造をめぐって」『国際文化研究』18 号、17－29、2014〔査読有〕
http://hdl.handle.net/10519/5473

③ 瀧口　順也「スターリニズムの演出と舞台装置：ボリシェヴィキ党大会（1927－1934）」『ロシア史研究』90 号、21-42、2012〔査読有〕

〔学会発表〕（計　５件）

① Junya Takiguchi, “Stalinism Orchestrated: The Bolshevik Party Congress, 1927- 1934”, Annual Conference of British Association for Slavonic and East European Studies [BASEES]、2015 年 3 月 29 日、於：ケンブリッジ大学

② 瀧口　順也「権力の表象と政治の文化史－スターリニズム表象とプロパガンダ研究の動向から」ソヴィエト史研究会 2014 年度大会、2014 年 6 月 21 日、於： 東京外国語大学本郷サテライト

③ 瀧口　順也「E.H.カー 『ソヴィエト・ロシア史』を読み直す－ロシア革命 100 周年に向けて」ソ連東欧史研究会、2013 年 12 月 27 日、於：西南学院大学

④ Junya Takiguchi, “Biography as History?: Beyond National Hero/Heroine Paradigm and the Case of Molly Murphy”, Afrasia Research Centre Workshop (with Leiden University) 2013 年 12 月 10 日、於： 龍谷大学アフラシア多文化社会研究センター

⑤ 瀧口　順也「ソ連初期の政治文化と権力表象」近代社会史研究会、2013 年 3 月 16 日、於：京都大学

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
瀧口　順也（TAKIGUCHI, Junya）
龍谷大学・国際文化学部・講師
研究者番号：10596802